



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	札幌農学校のころの北海道 : 三条実美太政大臣北巡を手掛かりに
Author(s)	井上, 高聡
Citation	北海道大学大学文書館年報, 8, 17-30
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52331
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARHUA8_002.pdf



< 研究ノート >

札幌農学校開校のころの北海道

—— 三条実美太政大臣北巡を手掛かりに ——

井上 高聡

はじめに

開拓使は、1874年12月に東京の開拓使仮学校の札幌移転と専門科開設を決定し、1876年8月に札幌農学校を開設した¹⁾。開拓使がこの時期に札幌農学校を開校した意図については必ずしも明瞭ではない。開拓使は、1874年12月に、教育行政を所管する専門部署として学務局を設置し、専門技術者養成から初等教育普及へと教育政策の軸足を移したことから、札幌農学校開校もこうした開拓使の教育政策の転換の一環であると考え得る²⁾。さらに、こうした開拓使の教育政策の転換自体も、開拓使の北海道統治政策や「開拓」事業の画期を示している。

1876年7月から9月に掛けて、三条実美太政大臣と山県有朋陸軍卿、伊藤博文工部卿、寺島宗則外務卿の3名の参議らが北海道・東北地方を巡見した。いわゆる三条実美太政大臣の北巡である。中央政府要人が北海道視察をこの時期にはじめて実施したことは、北海道を取り巻く状況に転機が訪れていたことを証左する³⁾。後述するように、黒田清隆開拓長官が大臣・参議らの北巡を働き掛け、開拓使が視察日程・場所などの計画を立案した。大臣・参議らが行なった視察には、開拓使が積極的に披瀝したい施策内容が色濃く反映していると考えられる。

本稿では、三条実美太政大臣北巡を手掛かりに、札幌農学校開校当時の北海道を取り巻く状況を考察する。

1. 三条実美太政大臣北巡の目的

1876年5月13日、黒田清隆開拓長官は大久保利通内務卿に宛てた書簡で、「北地巡検ノ義ニ付別紙之通陸軍工部両卿江致懇願置候間情実御賢酌被下願之通速ニ御允許相成候様御尽力之程偏ニ奉懇願候也」⁴⁾と伝えた。北海道視察について、山県有朋陸軍卿と伊藤博文工部卿に宛てて依頼状を出す予定であることを報告し、大久保にも実現に向けた執り成しを依頼した。

黒田が別紙として大久保宛て書簡に添付した、5月15日付けの山県有朋陸軍卿・伊藤博文工部卿宛て書簡は、両者に北海道視察を依頼する内容であった。

尚々陳は今度陸羽 御巡幸被 仰出下官管内之義も 御巡幸相成度候間兼而奉願置候
処何分未だ大臣及び卿輔等之巡検も無之地方なるを以御沙汰不相成遺憾千万奉存候、
就而は貴官方追々御関係之地なるハ申迄も無之本使事業着手之情実ニより建議又ハ協
議等之際実地形勢御諳知無之而は多少之不都合有之候得は此度之機会を幸として右大
臣公并参議一名貴官方御一同ニ是非御巡検被成下候様致し度、右ハ出發前御暇乞旁参
叩縷述御願立を乞ひ候心得之處、紛冗不能其議乍失敬以鄙書相願候条何卒御合議之上
御願立相成必ず御許可相成候様御尽力偏ニ奉懇願候、旅中匆々頓首⁵⁾

黒田は、山県・伊藤らの北海道視察を求める理由として、第一に、この後5-7月に予
定されている明治天皇の東北巡幸に当たって、北海道への巡幸も実施することを提案した
が、大臣・卿・輔といった中央政府首脳が未だ視察を行っていないことを理由に却下さ
れたことを上げた。第二に、北海道における事業が、陸軍省や工部省の所管にも関わるこ
とを上げ、開拓使が今後進める事業を協議する際に、両卿が実地視察をすることが有意で
あることを述べた。黒田は具体的な北海道視察人員として、山県・伊藤のほか、岩倉具
視右大臣と参議もう一名を想定した。

5月17日、大久保内務卿は伊藤工部卿に書簡を宛て、黒田開拓長官の上申について自身
の見解を述べた。

唯今参上候処御外出之由にて引取候。差立る事にも無之候得共御談置申上度、事件は
北海道え大臣参議云々、黒田より上申候。就而は自ら御都合も有之、強而御出無之共
宜くと存候得共、御巡行之事は先年来御内定も有之、且此節大臣参議未出張せざる事
も御沙汰も被為在候に付而は、当夏中黒田願通大臣参議巡回有之可然。条公も始終東
京之区域を御踏出之事も無之今度幸之機会に候間、還幸則御出張被為在候は、第一
は御一身上健康之御為にも宜、随而利益も不少事に可有之愚考仕候。如何御賢考に可
有之哉。御同意におひては条公え御進め申上度存候。参議は如何様共時宜次第に而可
然候。此旨以楮上艸々何分御報奉願候。拝白⁶⁾

大久保は、不都合であれば伊藤の北海道視察参加は無理をしなくても良いとの考えを示し
つつ、大臣・参議の北海道視察をこの夏に実施するとの黒田の提案に同調した。さらに三
条実美太政大臣が東京外の地方へ赴く好機会であるとの考えを示し、伊藤が三条の北海道
視察に賛成すれば、大久保が三条に意向を確認するとの内容であった。

木戸孝允は奥羽巡幸随従として出發する前日の6月1日、黒田清隆に宛てた書簡で、「尚
又先生より諸彦へ御申入之辺も有之太政大臣公始還幸次第御出發之由い細は頓に御承知と
奉存候」⁷⁾と、明治天皇の奥羽巡幸が終わり次第、三条実美太政大臣をはじめとする一行
が北海道へ出發することが決まっていることを伝えた。

1901年10月に宮内庁書陵部が編纂・刊行した『三条実美公年譜』⁸⁾は、三条の北巡につ
いて「唐太千島交換ノ事ヲ主トシ且ツ屯田開拓ノ実況ヲ視察シ以テ北門鎖鑰ヲ嚴ニスルニ
在リ」⁹⁾と記述している。三条らが北巡を行なった1876年の前年、1875年5月に日本政府
はロシア政府と「樺太千島交換条約」を結び、幕末以来、「日露雑居」状態であったサハ

リン島をロシアに引き渡し、ロシア領であったウルップ島以北シュムシュ島までのクリル諸島全18島を日本領とした¹⁰⁾。開拓使は同じ1875年5月に、1874年10月制定の「屯田兵例則」に基づき、琴似屯田兵村への入地を実施に移した¹¹⁾。樺太千島交換条約と屯田兵制の実施は、開拓使の政策が、幕末以来の版図として不安定な北地の対策から、実効ある北海道「開拓」事業へと移行する象徴的な施策であったと言える。黒田が北海道「開拓」事業に関係する中央諸省の卿に北海道視察を求めたのも、北海道「開拓」事業が具体化の段階へと向かうことを見越してのことであった。

2. 北巡の人員と行程

北巡には、三条実美太政大臣、山県有朋陸軍卿、伊藤博文工部卿、寺島宗則外務卿に、その随行者が加わった。屯田兵制に関わる陸軍省、対ロシア外交に関わる外務省に加え、北海道の鉱山開発に関わる工部省が人員に加わっていることは、北海道「開拓」の具体化に理解を求めようとする黒田の意図を示していた。また、北巡の行程からも、北海道「開拓」の進展状況と、今後の事業展開を具体的に説示しようとする開拓使の意図を窺い取ることができる。

以下、北巡同行者による公的な記録である「北巡日誌」等により、視察の内容を確認する。

表1 三条実美太政大臣北巡人員

名前	役職	役割	北巡後の主な職歴
三条実美	太政大臣	北海道巡視	
山県有朋	参議、陸軍卿	北海道巡視	内務大臣、枢密院議長、総理大臣
伊藤博文	参議、工部卿	北海道巡視	枢密院議長、総理大臣
寺島宗則	参議、外務卿	北海道巡視	元老院議員、枢密顧問官
陸奥宗光	元老院幹事	北海道巡視随員	衆議院議員、農商務大臣、枢密顧問官、外務大臣
巖谷修	太政官権大史	北海道巡視随員	内閣大書記官、元老院議員
尾崎三良	太政官一等法制官	北海道巡視随員	法制局長官、宮中顧問官
石井省一郎	工部省土木権頭	北海道巡視随員	内務省土木局長、岩手・茨城県知事、衆議院議員
石橋重朝	大蔵省七等出仕	北海道巡視随員 (内務大丞心得)	内閣書記官（統計局長）
手塚光榮	太政官大主記	北海道巡視随員	宮内省高等官
根本茂樹	太政官大主記	北海道巡視随員	
坂田厚久	正院等外一等出仕	北海道巡視随員	
永田景靖	正院等外二等出仕	北海道巡視随員	
竹内正信	宮内省四等侍医	太政大臣差添	
丸茂文興	宮内省三等藥劑生	竹内正信差添	
中村房明	直丁（宮内省）	竹内正信差添	

大野誠	工部権大丞	工部卿随行	長野県令
中井弘	工部権少丞	工部卿随行	元老院議員、滋賀県・京都府知事
中溝則武	工部権大録	工部卿随行	
林紀	陸軍軍医監	北海道差遣	陸軍軍医総監
上領頼方	陸軍大尉	北海道差遣	陸軍歩兵大佐
川上寛	陸軍八等出仕	北海道差遣	
結城賛	陸軍会計軍吏試補	北海道差遣	
園田安賢	警視庁中警部	北海道出張	警視総監、貴族院議員、北海道庁長官、 宮中顧問官
島田三郎	元老院大書記生 (陸奥宗光指揮下)	北海道差遣	衆議院議長
大塚恒三郎	工部省土木権大属	石井省一郎随行	
中山孝教	工部省十二級出仕	石井省一郎随行	
佐藤秀顕	開拓使八等出仕	先導	札幌県大書記、北海道庁理事官、 通信省管船局長

〔出典〕「太政大臣北巡書類 北巡日誌 完」(国立公文書館蔵、2A-33-8-単862)、「太政大臣北巡書類 北巡日誌附録第一」(国立公文書館蔵、2A-33-8-単863)、大蔵省印刷局編『職員録』、国立公文書館デジタルアーカイブ

表2 三条実美太政大臣北巡行程

日付	行程・滞在地	巡検場所
8/05-10	横浜～釜石～函館	釜石に滞在し、伊藤工部卿らが鉄山視察
8/11	函館港入港	函館上陸
8/12	函館	船改所、砲台、病院、松蔭・会所学校、函館支庁舎、裁判所
8/13	函館	三条大臣風邪のため巡視延引
8/14	函館	巡視無し
8/15	函館→七重→函館	勸業課試験場(七重村)
8/16	函館	三条大臣耳下腺腫のため視察中止
8/17	函館	松蔭・会所学校生徒、七重村農業現術生徒へ
8/18	函館	
8/19-20	函館～小樽	
8/21	小樽→札幌	
8/22	札幌	札幌本庁
8/23	札幌	石狩川、丘珠村清国招募農夫開墾地 (山県・伊藤・陸奥らは、札幌へ戻らず、ホロムイへ出発)
8/24	札幌	札幌学校、第一小学校、病院、偕楽園
8/25	札幌	製作場、水車木挽器械所、水車製糸場、麦酒葡萄酒製造局、蒸気 製糸場、豊平橋
8/26	札幌	札幌神社、円山村鶴岡県士族開墾地、 (山県・伊藤・陸奥らがホロムイより帰着)
8/27	札幌	巡視を雨天中止

8/28	札幌	一号官園
8/29	札幌→千歳	島松のアイヌ伍長の居、千歳のアイヌの謡い・舞い
8/30	千歳→苫小牧	
8/31	苫小牧→白老	白老のアイヌの騎馬・熊祭儀式
9/01	白老駅→室蘭	工業局蒸汽木挽器
9/02	室蘭～紋別	有珠郡紋鼈村開墾地
9/03	室蘭～函館 (参議：陸路)	
9/04	函館	大野村桑園、五稜郭
9/05-30	函館～青森→東京	函館港～青森

〔出典〕「太政大臣北巡書類 北巡日誌 完」（国立公文書館蔵、2A-33-8-単862）、「太政大臣北巡書類 北巡日誌附録第一」（国立公文書館蔵、2A-33-8-単863）

3. 函館における巡検

1876年8月5日、三条実美太政大臣北巡一行は東京を発ち横浜へ到着、6日に横浜港を出帆した。釜石に立ち寄り、11日函館港に入港した。

開拓使が事前に提出していた行程表では、函館に4日間滞在し招魂社、台場、税関、船改所、大野村桑園、五稜郭、七重村勸業課試験場を視察する予定であった¹²⁾。実際には、北巡一行は8月18日までの8日間、函館に滞在した。三条が体調を崩したため、12日に市街官公署、15日に七重村の勸業課試験場を視察したのみであった。

12日に視察した市街官公署は、船改所、砲台、函館病院、松蔭・会所学校、函館支庁舎であった。

船改所は、松前藩が船舶・船荷などに徴税する沖の口番所に起源を持ち、こうした海関税は、海産資源に頼っていた近世以来の蝦夷地の重要な財源であった。しかし、開拓使は物産流通を促して北海道「開拓」事業推進のため、1872年から一時的に課税免除を行っていた。1875年2月に、移出物品に対する課税を復活することとし「北海道諸産物出港税則並船改所規則」を制定した¹³⁾。「北巡日誌」は、船改所について「我国人ノ北地産物ヲ輸出スル者ヨリ税金ヲ徴スル」¹⁴⁾と記述し、北海道の財政と流通の要としての函館港の運用を開拓使が説明したことを示している。

1871年にアメリカ人医師S. エルトリッチを招聘して医師養成・医療普及を図り、北海道全域の病院を統轄した函館病院¹⁵⁾や、1875年から函館地域の模範校として学校普及・定着策の拠点となった松蔭・会所学校¹⁶⁾、1875年5月に開庁した函館裁判所¹⁷⁾など、開拓使による北海道統治体制整備を印象付ける視察となっている。

8月15日に視察した、七重村勸業課試験場は、七重開墾場として発足し、1871年11月（明治4年12月）に農家18戸を移住させ、1872年11月（明治5年10月）に雇い農夫11戸を入植した¹⁸⁾。1873年3月には、東京の開拓使官園からアメリカ種家畜と、西洋式農業技術の習

得を目指す農業現術生徒を移した¹⁹⁾。開拓使が最初に手掛けた大規模農業開墾事業であった。「北巡日誌」は「幅員凡ソ二十八万坪余大半既ニ開墾シ松杉梨桃各種ノ苗ヲ栽スルコト数万本米麦蔬菜桑麻瓜蔓ノ類モ亦能ク地味ニ適シ繁殖暢茂セサルナシ牧場ニ至レハ洋産ノ牛馬アリ綿羊アリ柵欄ヲ設ケ之ヲ放ツ」²⁰⁾と、28万坪（約924,000m²）の敷地の大方は開墾済みで、果樹・穀物・蔬菜の類に加え、牛・馬・羊の畜産も手掛け、相応の成果を上げている様子を記載している。

4. 札幌における巡検

(1) 札幌市街の情景

北巡の行程は、函館から陸路で札幌へ向かう予定であったが、三条の体調不良を気遣い、函館から小樽へ航行することとなった。8月19日に函館港を出帆し、翌20日に小樽港へ入港し、小樽市街へ上陸した。

21日、一行は午前5時に小樽を発ち札幌へ陸路を取った。熊碓、朝里、銭函、手稲、琴似の屯田兵村を経る行程は、現在の小樽・札幌間交通路とほぼ同様である。「午後四時札幌ニ入ル其高帽皂服シテ郭外ニ迎拝スル者ハ本庁ノ官員ナリ其戎装撃銃シテ路傍ニ整列スル者ハ屯田ノ兵隊ナリ其他区戸長学校生徒等皆街頭ニ跪ク戸々日章旗ヲ掲老幼男女出テ、拝スル者堵ノ若シ」²¹⁾と、高帽黒服の官員、捧げ銃の屯田兵、区戸長、学校生徒らが沿道で一行を出迎えた。

この同じ行程を21日前、札幌農学校教頭W. S. クラークら外国人教師3名と東京からの入学者11名が辿っていた。第一期生として入学した佐藤昌介・大島正健が後年、以下のように回想している。

玄武丸を小樽に廻航し、銭函を経て札幌に入るの順序であった。当時の小樽は寂寞たるものであって手宮方面には、今の越中屋が、砂浜上に孤立して居た、港町方面は少々人家があったとは云へ、要するに大なる漁場に過ぎなかった。小樽よりは馬上の人となって、銭函を経て札幌に入り、直ちに、札幌学校寄宿舍の人となった²²⁾。

玄武丸は七月三十一日午前二時に小樽へ入港したが、まだ小樽札幌間の鉄路が通じていなかった時のこととて、黒田長官とクラーク先生の一行とは、それより陸路を肥馬に鞭うって札幌に向い、学生達はうすきたない漁船に身を托して銭函に向い、それより五里十一町の道を馴れぬ馬背にしがみつきながら当時人口僅かに二三千に過ぎなかった札幌へと向っていった。銭函を発してから海に分れた道は、鬱蒼たる森林地帯を通って軽川に出で、それより琴似に向ったが、この間所々に農家が散在し、琴似には屯田の建物らしきものが並列しているのが目についた²³⁾。

北巡一行は、黒田・クラークと同様に全行程陸路を取ったが、銭函から陸路に合した生徒たちも目にした、琴似屯田兵村を目にしている。

札幌市街について、「北巡日誌」は以下のように記録した。

市街ハ井ノ如画シ道路ハ砥ノ如平カニ家屋軒ヲ並ヘ肆廛貨ヲ陳ネ頗ル都会ノ景状ヲ模ス然レトモ創建ノ日猶浅ク移住ノ民未タ多カラサルヲ以テ繁盛ノ実蹟ヲ見ルニ及ハス而シテ学校アリ病院アリ監獄舎アリ邏卒署アリ其他電信郵便ノ局養蚕製糸ノ場職工裁縫漉紙製革釀酒造油ノ諸所ニ至ルマテ建設セサルモノナシ蒸気及ヒ水車ノ力ヲ以テ器械ヲ運転シ木材ヲ製作シ鉄具ヲ鑄造スル所アリ工事最盛ナリ²⁴⁾

移民ノ未タ土地ニ慣レサルヲ以テ自立ノ道ヲ得ルモノ少ナシト然レトモ往々私金ヲ有シ来ツテ産業ヲ求メ物品ヲ輸出シ次テ商店ヲ開キ大イニ資財ヲ興スモノアリト〔中略〕市街ハ道路井画ニシテ縦横四通人家碁布家屋ノ制ハ函館小樽等ニ比シ戸々店ヲ開イテ雜品ヲ買売ス然レトモ創建日猶浅キヲ以テ商売ノ業未タ繁昌ノ景況ヲ見ス加ルニ市街居民ノ内ト雖トモ多ク本州ノ物産ノ商業ヲ為スニ至テハ江差小樽余市浦河根室等著名ノ海港ニ就カサレハ十分ノ利ヲ網スルヲ得ス故ヲ以テ市街ノ商売ハ纔カニ各民日用ノ便ニ供スヘキ物品ニ過サルノミ²⁵⁾

道路、家屋、商店、公共施設、各種製造所などの都市形成を整然と行なっているが、都市として活況を呈している状況になく、土木工業が隆盛である様子などを記している。また、札幌市街居民は独立した生計・生業が十分確立していないこと、商業面では札幌は函館・小樽に比べ店舗を構えた商店が整っているがはかばかしい商況ではないこと、海港都市ではないため北海道外との流通・商取引が成り立っていないことなど、札幌が形成途上の新都市であったことを示している。

尾崎三良も、「札幌は北海道の全般の政権の集る所にして、将来大いに発展せしむるの予想を以て市街を計画し、政庁を中央に置き八方より之に輻輳せしむる積りにて、政庁の周囲数十間乃至数丁の間を空地にしたる故、旅館より一寸市街へ出て買物を為さんとするも数丁を歩せざるべからず。実に不便なりし。且つ街路を広く取り総て規模を拡大にしたるも、商業人口之に副はず頗る荒涼の感ありし。」²⁶⁾と回想している。

市街は戸数721戸、人口2619人であった²⁷⁾。

(2) 札幌地域の巡検

北巡一行は8月21日から28日まで札幌に滞在した。市街地域では22日に開拓使札幌本庁舎、24日に札幌農学校、公立第一小学校、札幌病院、偕楽園、25日に官営工場と豊平橋、26日に札幌神社、円山村開墾地、28日に第一官園を視察した。23日には郊外へ赴き、石狩川流域と丘珠村開墾地などを視察した。

25日に視察した製作所は、開拓使が1872年から札幌市街東端の札幌本庁工業課管理地に設置した器械工作所群である。蒸気木挽器械所、水車器械所、鍛工所、鑄造所、木工所などの工作所があり、アメリカ技術者N.W.ホルトの指導の下、運営していた²⁸⁾。「北巡日誌」は以下のように記述している。

製作場ハ庁ノ東ニ方リ周囲凡二町余場内ニ水車木挽器械鍛冶鑄物所秤量製作所水車製糸所木具製作所ノ各局ヲ設置ス前ニ豊平川アリ此流ヲ開シテ場内ニ通シ山ニ伐ルノ巨

材ヲ浮ヘテ直ニ場内ニ流シ入レ内ニ巨溜ヲ設ケテ其材ヲ浮漬シ此溜水ヲ又分流シテ各器械所ニ通シテ工業ノ便ヲ為セリ

水車木挽器械所ニ於テハ溜池ニ浮ヘル巨材ヲ器械ニテ工場ノ二階ニ操揚ケ円形ナル鋸機ヲ以テ之ヲ板ニシ之ヲ柱ニス其工ノ速ナル驚クニ堪タリ其挽割タル各種ノ木材ヲ工作所ニ移シ書棚や箆笥や椅卓戸障子ノ類ヲ製スルニ又水車器械ノ功力仮用スト云

水車製糸場ハ昨年ヨリ営繕ヲ起シ本年ニ落成スト現ニ女工七十三人日々製糸ニ従事ス其繭ハ皆本邦各地ノ養蚕所ニ得ル所ナリト局内ニ繭糸ノ類ヲ陳列シ又各地方ニ蕃殖セル野生ノ葉ヲ厚紙ニ粘シテ壁ニ揚ケリ中ニ幅九寸余長一尺二寸ナルモノアリ是ハ対鷹及ヒ篠路太辺ニ生スルモノナリト云²⁹⁾

豊平川を利用した木材の運搬、河流を敷地内に引き込んで作業工程に利用する様を記載している。このほか、麦酒葡萄酒製造局、蒸気製糸場、豊平橋など、札幌の都市開発状況の視察に一日を費やした。

視察した開墾地はそれぞれ形態が異なった。丘珠村開墾地は、1876年5月に清国山東省出身農夫9名を開拓使が雇い、農業に従事させた³⁰⁾。円山村開墾地は、1870年に入植した旧鶴岡藩土族が集団入植し、1875年から養蚕を起業した³¹⁾。「北巡日誌」には「数万ノ桑苗地ニ満チ其若桑ノ柔条ニ添フル扶木満園ニ矗々トシテ恰モ落葉セル林ヲ見ルニ似タリ〔中略〕従事スルモノ百五十六名墾ク所ノ総坪二十一万九千九百一十坪余其業ノ迅速ナル実ニ驚クニ堪ヘシ」³²⁾と記載している。一号官園は七重村勸業課試験場と同様に西洋式農具を用いて西洋種の家畜飼養、農作物栽培を試験的に行ない、1876年9月に札幌農学校教頭W. S. クラークの進言により農養園（札幌農学校の農場）となった³³⁾。

さらに特筆すべきは、8月24日から26日の3日間の行程で、山県有朋陸軍卿、伊藤博文工部卿、陸奥宗光元老院幹事らが行なったホロムイの煤田（幌内炭山）の視察である³⁴⁾。幌内炭山は、1868年に偶然発見され、開拓使が調査を進めた。1873年以降、開拓使の地質測量技師B. S. ライマンが繰り返し調査を行ない、1875年6月には黒田清隆開拓長官も巡視した。ライマンの調査により、幌内炭山が非常な埋蔵量を有することが明らかとなり、幌内炭山の開発は開拓使の最重要課題となっていた³⁵⁾。1876年5月15日付け山県有朋・伊藤博文宛て書簡で両名に北海道巡検を依頼した際、黒田が「本使事業着手之情実ニより建議又ハ協議等之際実地形勢御諳知無之而ハ多少之不都合有之」³⁶⁾と述べた具体的な事業の一つは、幌内炭山開発であったと言える。

5. 札幌農学校への視察

北巡一行の8月24日の札幌農学校視察について、農学校側の資料を交えながら、詳述する。

札幌農学校は、札幌学校専門科として1876年8月14日に開業式を挙行した。8月14日の開校段階では専門学科生徒は、教頭W. S. クラークら外国人教師が東京英語学校・開成学

校から選抜した11名、札幌学校の普通学生徒（専門科への準備教育課程）からの進学者13名の計24名であった。開校後、複数の私費通学生が在籍するが極めて短期間で退校した。講義が始まったのは、北巡一行が札幌に到着した4日前、視察の1週間前の17日であった³⁷⁾。札幌学校が正式に札幌農学校と改称するのは9月9日である³⁸⁾。

先述のように、北巡一行が21日に札幌に到着した際、学校生徒が沿道で出迎えたとの記述が「北巡日誌」に見られるが、農学校の資料ではこの事実は確認できない。出迎えに札幌農学校生が参加していたかは分からない。

視察当日の24日、「北巡日誌」は札幌農学校視察の様子を以下のように記載している。

午前八時半ヨリ札幌学校ヲ始第一公立小学校病院等巡視〔中略〕

札幌学校ハ庁ノ東凡二町計ノ所ニ設ク家屋洋制ニシテ椅卓清潔ヲ覺ユ楼下ヲ分ツテ書籍局及ヒ学務局トシ楼上ノ右ヲ講場トシ左ヲ教師ノ室トナセリ現今専門生徒ノ校ニ居ル二十五名ニシテ本日講習ノ席ニ就クモノ二十一名皆一様ノ洋服ヲ着シ大臣ニ敬礼シテ椅ニ倚リ而シテ教師ノ質問ニ荅フ教師クラーク氏ハ米人ニシテ曾テ本国ニ於テ農学ノ校長タリシト云楼ヲ下ツテ回廊ニ入レハ又一区ノ広堂アリ内部ヲ数区ニ劃シテ生徒ノ寄宿所トス室内清掃諸具整備スルカ如シ〔中略〕

此夜開拓少判官調所広丈大臣参議寺島宗則権大史岩谷修一等法制官尾崎三郎等ヲ札幌学校ニ招餐ス³⁹⁾

開校当初の札幌農学校の主な施設は、開拓使顧問H.ケブロンが札幌を訪れた際に使用した洋館宿舎を増改築した講堂と、寄宿所であった⁴⁰⁾。2階建て講堂の1階が書籍庫（図書館）と開拓使札幌本庁学務局の事務室であり、2階が講義室と教師室であった。視察時の専門科生徒は25名、出席者は21名と記載しているが、欠席者の一人は8月6日以来、体調を崩している佐藤勇とある⁴¹⁾。北巡一行はクラーク教頭の講義を視察した。開校当初は、クラークは午前8時30分から9時30分には本草学（植物学）を教授していた⁴²⁾。札幌農学校には、寄宿所として別棟の建物があつたが、「北巡日誌」によると講堂と回廊で繋がった建物が、当初は専門科生徒の宿所となっていたようである。この日の夜、札幌農学校長を兼務する調所広丈が三条、寺島らを学校に招いて饗応した。



札幌農学校講堂
(1876年、北海道大学大学文書館蔵)

この「北巡日誌」に対応する農学校側の資料は、漢学担当教員平野候次郎が記載した「当直日誌」の以下の記載である。

本日八時三条公其外参議諸官員出校相成候事

同日六時より右之面々に於講堂洋食御餐應有之候ニ付本日明日之間和食相与へ候段生徒に申達ス⁴³⁾

札幌農学校では、生徒の夕食に洋食を給仕していたが、この日は食材を三条らへの洋食饗応に廻したため、生徒の夕食は和食となった。なお、9月10日からは朝・夕食が洋食となった⁴⁴⁾。

26日には、25日付け三条実美太政大臣が「教授法ノ全良ナルニヨツテ其生徒ノ学業進歩セシコトヲ同人〔W. S. クラーク〕へ諭示スヘキ旨」⁴⁵⁾を本庁に通知し、以下の口達があった。

札幌学校教師クラーク氏教授方格別勉励生徒学業追々進歩之段重畳之事ニ候猶帰京之上委曲可及奏聞定テ御満足ニ可被思召被存候此旨可然御通知有之度此段申入候也⁴⁶⁾
講義を開始して1週間では、実際には未だ生徒の学業の進歩を見込めるは状況ではなかった。この後、9月21日に第1期生として入学した24名中5名が「学術不足」を理由に退校処分となった⁴⁷⁾。

北巡一行が札幌を発つ29日の前日、28日の「北巡日誌」に、「クラーク外二名旅館ニ来リ名刺ヲ投シ別レヲ告テ去ル」とある。W. S. クラーク、W. ホイラー、D. P. ペンハローの3人の外国人教師である。

同日、当直担当の農学校事務掛加藤政敏が宿所の生徒に以下のように布達した。

三条公参議方明廿九日午前六時当地御出発ニ付生徒一統豊平橋迄御見送可致様相達シ相成候間明日限り午前四時半臥床ヲ離レ五時室外整列終テ食堂ニ就キ五時半当直之者同行出校之筈候条此段及御通知候也⁴⁸⁾

北巡一行を生徒一同で豊平橋まで見送るため、29日は午前4時半起床、5時朝食、5時半出発を命じた。夏期の農学校では午前6時起床、6時半朝食が日課であったから、生徒たちはかなり辛い朝を強いられた。

8月29日の農学校の「当直日誌」には以下の記載がある。

一本日午前六時三条公并参議方当地御出発相成ル依テ官員并生徒一統御見送トシテ豊平橋迄罷出ル

一安田長秋 横山彦次郎 荒川重秀 島津勇治 上村行孝 高林吉太郎 伊藤一隆 メ七人朝整列ヲ欠キ候事⁴⁹⁾

午前6時に札幌を出発する北巡一行を、札幌農学校生徒は豊平橋で見送った。案の定、7人の生徒が集合でできなかった。この7人は、9月2日に「廿九日朝整列ヲ欠キシニ付明三日日曜日散歩ヲ禁候事」⁵⁰⁾と、日曜日の外出を禁じられた。

24日の視察について、農学校外国人教師W. ホイラーは9月10日付け母親宛て書簡で簡単に触れている⁵¹⁾。

W. S. クラークの名前で1877年に開拓使が刊行した *First Annual Report of Sapporo Agricultural College*. (和訳版は『札幌農学校第一年報』) は、北巡一行の視察について以下のよう

に記載している。

In August last the College was visited by His Excellency Prime Minister Sanjo, Minister of Foreign Affairs Terashima, Minister of War Yamakata, Minister of Public Works Ito and many other officers of their party. The Prime Minister was graciously pleased to express in writing his satisfaction with what he saw, and generously presented a testimonial of his approval to each of the best five scholars.⁵²⁾

客秋太政大臣三条閣下寺島外務卿山県陸軍卿伊藤工部卿其他随行官員数名本農ニ巡視セラレ辱ケナクモ太政大臣ハ其親視セラレシ所其旨ニ適セシ趣ヲ演ラレ最上級生徒五名ヘ各々賞美ノ徽章ヲ恩賜セラレタリ⁵³⁾

生徒として視察を迎えた佐藤昌介は、「其の八月末、三条公が御名代として渡道せられ、山県、伊藤、寺島の諸卿を従へ、当学校に臨まれた」⁵⁴⁾と回想している。*First Annual Report of Sapporo Agricultural College*. も佐藤の回想も、記述は正確ではなく、8月24日には山県、伊藤は幌内炭山へ赴いており、札幌農学校を視察していない⁵⁵⁾。

6. 札幌から函館への行程における巡検

8月29日に札幌を発った北巡一行は陸路を函館へ向かった。途中、9月1日には室蘭で、1874年に西洋船舶製造を目的に開拓使が開設した室蘭器械所⁵⁶⁾の蒸気木挽器を視察した。2日には、1869年に旧仙台藩亘理領主伊達邦成家臣団が集団入植した有珠郡紋鼈村開墾地⁵⁷⁾を視察した。4日には函館に滞在し、五稜郭、1875年に七重村勸業課試験場の附屬地として養蚕事業を開始した大野村桑園⁵⁸⁾を視察した。

札幌から函館への途次、北巡一行はアイヌ家屋などを目にしている。29日には島松で「土人伍長暮安無久留」の居を見学し、千歳駅では旅館にアイヌを集め謡舞を演じさせた。「北巡日誌」は「其風習淳朴ニシテ自カラ太古ノ風ヲ見ルニ足ラン」⁵⁹⁾と記した。翌31日には、アイヌの騎馬と熊送りを見物した⁶⁰⁾。「北巡日誌」は、いずれも恭順を示すアイヌの姿を記録している。

北巡一行は、9月5日に函館港を発ち青森港へ向かった。青森からは主に陸路を取り、30日に東京に到着するまで奥羽地方各地を巡検した。

おわりに

以上、1876年8-9月実施の三条実美太政大臣北巡の目的と、北巡行程の内、8月10日から9月5日までの北海道巡検の概略から、札幌農学校開校（1876年8月14日）当時の北海道の状況を確認した。

北巡に際して開拓使が披瀝したかったのは、「開拓」の成果が上がりつつあり、今後さらに成果を上げる必要のある北海道の実情であったと言える。開拓使は、都市建設、行政の整備、学校・病院の設置、勸農事業の進展、工場の開設など、北海道「開拓」事業の基盤形成を進めてきたが、次の段階として、例えば、鉱山開発、屯田兵村の増設など、「開拓」事業をより実効あるものにする施策を実施することが課題となっていた。札幌農学校開校は、こうした開拓使の北海道「開拓」政策の潮目に位置付けていたと言える。

札幌農学校の組織体制やカリキュラム、卒業生の進路などは、この後、展開する北海道「開拓」政策と深く関わることとなる。札幌農学校と北海道「開拓」政策の具体的相関を検討することは、今後の課題である。

【注】

- 1) この間の経緯については、井上高聡「札幌農学校開校（1876年）の経緯」（『北海道大学大学文書館年報』第7号、2012年3月）、5-16ページ参照。
- 2) 井上高聡「開拓使の教育政策の転換——1874年学務局・学務係設置を支点として——」（『日本の教育史学』第54集、教育史学会、2011年10月）、6-18ページ。
- 3) これに先立ち、同年5月から7月に掛けて、明治天皇が行なった東北地方巡幸の際、寄港のみの予定であった函館において、開拓使の強い要望により、急遽1日間巡行を行っていた。
- 4) 1876年5月13日付け大久保利通宛て黒田清隆書簡（『大久保利通関係文書』三、吉川弘文館、1968年12月）、20ページ。
- 5) 1876年5月15日付け山県有朋・伊藤博文宛て黒田清隆書簡（前掲注4、『大久保利通関係文書』三）、20-21ページ。
- 6) 1876年5月17日付け伊藤博文宛て大久保利通書簡（『伊藤博文関係文書』三、塙書房、1975年3月）、242ページ。
- 7) 1876年6月1日付け黒田清隆宛て木戸孝允書簡（『木戸孝允文書』七、日本史籍協会、1931年2月、4-5ページ）。
- 8) 1901年10月に宮内庁書陵部が編纂・刊行した三条実美伝記。
- 9) 宮内省書陵部編『三条実美公年譜』（宗高書房、1969年10月覆刻）、773-774ページ。
- 10) 秋月俊幸『日露関係とサハリン島——幕末明治初年の領土問題樺太千島交換条約——』（筑摩書房、1994年6月）、238-247ページ。
- 11) 『新北海道史』第3巻通説2（1971年3月）、376ページ。
- 12) 「大臣参議巡検書類 其二 官省本使局課往復及雑書 明治九年 記録課」（簿書番号01674、北海道立文書館蔵）、文書5。
- 13) 『函館市史』通説編第2巻（1990年）、667ページ。
- 14) 「太政大臣北巡書類 北巡日誌 完」（国立公文書館蔵、2A-33-8-単862）、1876年8月12日行。
- 15) 大蔵省編『開拓使事業報告』第4編（1885年11月）、282-286ページ。
- 16) 前掲注15、大蔵省編『開拓使事業報告』第4編、535ページ。
- 17) 前掲注13、『函館市史』通説編第2巻、295ページ。
- 18) 前掲注11、『新北海道史』第3巻通説2、464ページ。
- 19) 富士田金輔『ケプロンの教えと現術生徒——北海道農業の近代化をめざして——』（北海道出版企画センター、2006年4月）、55ページ。
- 20) 前掲注14、「太政大臣北巡書類 北巡日誌 完」、1876年8月15日行。

- 21) 前掲注14、「太政大臣北巡書類 北巡日誌 完」、1876年 8 月21日行。
- 22) 佐藤昌介「廿五年前迄」（『文武会々報』第65号、1912年 4 月）、2-3 ページ。
- 23) 大島正健『クラーク先生とその弟子たち』（帝国教育界出版部、1937年 7 月）、85-86ページ。
- 24) 前掲注14、「太政大臣北巡書類 北巡日誌 完」、1876年 8 月21日行。
- 25) 前掲注14、「太政大臣北巡書類 北巡日誌 完」、1876年 8 月22日行。
- 26) 『尾崎三良自叙略伝』上巻（中央公論社、1976年12月）、242ページ。
- 27) 前掲注14、「太政大臣北巡書類 北巡日誌 完」、1876年 8 月22日行。
- 28) 『新札幌市史』第 2 巻通史 2（札幌市、1991年10月）、237-240ページ。
- 29) 前掲注14、「太政大臣北巡書類 北巡日誌 完」、1876年 8 月25日行。
- 30) 大蔵省編『開拓使事業報告』第 2 編（1885年11月）、52ページ。
- 31) 前掲注30、大蔵省編『開拓使事業報告』第 2 編、22-23ページ。
- 32) 前掲注14、「太政大臣北巡書類 北巡日誌 完」、1876年 8 月26日行。
- 33) 前掲注15、『開拓使事業報告』第 4 編、418ページ。
- 34) 参議兼工部卿伊藤博文「巡視記行概略」、1876年 8 月24-26日行（早稲田大学社会科学研究所編『大隈文書』第 2 巻、1959年 3 月）、46-49ページ。
- 35) 前掲注11、『新北海道史』第 3 巻通説 2、594-595ページ。
- 36) 1876年 5 月15日付け山県有朋・伊藤博文宛て黒田清隆書簡（前掲注 4、『大久保利通関係文書』三）、21ページ。
- 37) 「当直日記 明治九秊一月ヨリ 札幌学校」（札幌農学校簿書044、北海道大学大学文書館蔵）、1876年 8 月17日行。
- 38) 「各舎布達簿 明治九年一月ヨリ」（札幌農学校簿書040、北海道大学大学文書館蔵）。
- 39) 前掲注14、「太政大臣北巡書類 北巡日誌 完」、1876年 8 月24日行。
- 40) 北海道大学125年史編集室編『写真集 北大の125年』（北海道大学、2001年12月）、4-5 ページ。
- 41) 前掲注37、「当直日記 明治九秊一月ヨリ 札幌学校」、1876年 8 月 6、25日行。
- 42) 「明治三十四年 札幌農学校公文録 第一冊 教務 自明治五年至明治十五年」（札幌農学校簿書871、北海道大学大学文書館蔵）。
- 43) 前掲注37、「当直日記 明治九秊一月ヨリ 札幌学校」、1876年 8 月24日行。
- 44) 前掲注38、「各舎布達簿 明治九年一月ヨリ 取締」。第 1 期生佐藤昌介は、「洋食は朝夕 2 度、牛肉はなかりしも鹿肉は甚だ多く、其のステーキは飽くまで貪っていた」と回想している（前掲注24、「廿五年前迄」、2 ページ）。
- 45) 前掲注14、「太政大臣北巡書類 北巡日誌 完」、1876年 8 月26日行。
- 46) 前掲注14、「太政大臣北巡書類 北巡日誌 完」、1876年 8 月26日行。
- 47) 「開拓使学校生徒表」（札幌農学校簿書041、北海道大学大学文書館蔵）。
- 48) 前掲注38、「各舎布達簿 明治九年一月ヨリ 取締」、1876年 8 月28日付け各舎宛て当直布達。
- 49) 前掲注37、「当直日記 明治九秊一月ヨリ 札幌学校」、1876年 8 月29日行。
- 50) 前掲注37、「当直日記 明治九秊一月ヨリ 札幌学校」、1876年 9 月 2 日行。
- 51) 1876年 9 月10日付け母親宛て W. ホイラー書簡（複写、北海道大学大学文書館蔵）、原資料はマサチューセッツ大学蔵。“The Prime Minister and Ministaer of War, and of Public Works, visited Sapporo and the College some days ago, of which I may have spoken in my other letter.”
- 52) *First Annual Report of Sapporo Agricultural College*, 1877, Tokei, published by the Kaitakushi, p.38.
- 53) 『札幌農校第一年報』（開拓使、1877年11月）、64ページ。
- 54) 前掲注22、佐藤昌介「廿五年前迄」、3 ページ。
- 55) 参議兼工部卿伊藤博文「巡視記行概略」、1876年 8 月24日行（前掲注34、『大隈文書』第 2 巻、46-47

ページ)。

- 56) 前掲注11、『新北海道史』第3巻通説2、559ページ。
- 57) 前掲注30、大蔵省編『開拓使事業報告』第2編、79-80ページ。
- 58) 前掲注30、大蔵省編『開拓使事業報告』第2編、305-306ページ。
- 59) 前掲注14、「太政大臣北巡書類 北巡日誌 完」、1876年8月29日行。
- 60) 前掲注14、「太政大臣北巡書類 北巡日誌 完」、1876年8月31日行。

(いのうえ たかあき／北海道大学大学文書館員)